

## §15. 補遺

次の命題は、例 7.9 の最後の方、および、補題 8.5 の証明で使われている。

**命題 15.1** 体  $K$  の乗法群  $K^\times$  の有限部分群は巡回群である。

**証明**  $A$  を  $K^\times$  の有限部分群とし、 $A$  に属する位数最大の元  $a$  をひとつとる。  $a$  で生成される巡回群  $\langle a \rangle$  が  $A$  に一致することを確認すればよい。そこで、 $\langle a \rangle$  に属さない  $b \in A$  が存在するとして矛盾を導く。  $a, b$  の位数をそれぞれ  $m, n$  とする。いま、素数  $p$  について

$$m = p^e m', \quad n = p^f n', \quad \text{ただし、} p \text{ は } m'n' \text{ を割り切らない}$$

とすると、 $a^{p^e}, b^{n'}$  の位数はそれぞれ  $m', p^f$  でこれらは互いに素だから、積  $a^{p^e} b^{n'}$  の位数は  $p^f m'$  である。よって、 $m$  の最大性より

$$p^f m' \leq m = p^e m', \quad \therefore f \leq e$$

となる。これが任意の素数  $p$  について成り立つから、 $m$  は  $n$  の倍数であることがわかる。とくに  $b^m = 1$  であり、 $m+1$  個の元

$$b, 1, a, a^2, \dots, a^{m-1} \in K^\times$$

はすべて多項式  $X^m - 1$  の根となるが、 $m$  次式は  $K$  において  $m$  個より多くの根をもたないから矛盾である。  $\square$

次に、やり残してあった補題の証明を与える。

**補題 15.2** (補題 8.9 再掲) 体  $K$  上代数的である  $\alpha, \beta$  が、 $\beta \in K(\alpha)$  をみたすならば、

$$|\text{Conj}(\alpha, K)| = |\text{Conj}(\alpha, K(\beta))| |\text{Conj}(\beta, K)|$$

が成り立つ。

**証明** 定理 6.11 より、 $\delta \in \text{Conj}(\beta, K)$  に対して、 $\sigma(\beta) = \delta$  をみたす  $\sigma \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  が存在する。このような  $\sigma$  を各  $\delta$  に対して 1 つずつ選んで固定し  $\sigma_\delta$  と表す；

$$\sigma_\delta(\beta) = \delta \in \text{Conj}(\beta, K) \quad (\sigma_\delta \in \text{Aut}(\overline{K}/K)).$$

補題を示すためには、ふたつの写像

$$F : \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K) \longrightarrow \text{Conj}(\alpha, K)$$

$$G : \text{Conj}(\alpha, K) \longrightarrow \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K)$$

を定義し、それらが互いに逆写像であること、すなわち  $F \circ G$  と  $G \circ F$  がそれぞれ恒等写像であることを確かめればよい。

(1)  $F$  の定義:  $\gamma \in \text{Conj}(\alpha, K(\beta))$  ならば、 $\gamma$  と  $\alpha$  は  $K(\beta)$  上共役であるから、 $K$  上でももちろん共役、よって  $\text{Conj}(\gamma, K) = \text{Conj}(\alpha, K)$  が成り立つ。さらに、 $\delta \in \text{Conj}(\beta, K)$  に対して、 $\sigma_\delta \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  が上のようにして定まり、 $\sigma_\delta(\gamma) \in \text{Conj}(\gamma, K) = \text{Conj}(\alpha, K)$  であるから、

$$F : \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K) \longrightarrow \text{Conj}(\alpha, K), \quad (\gamma, \delta) \mapsto \sigma_\delta(\gamma)$$

が定義できる。

(2)  $G$  の定義:  $\varepsilon \in \text{Conj}(\alpha, K)$  に対して定理 6.11 を適用すれば、 $\tau(\alpha) = \varepsilon$  をみたす  $\tau \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  が存在する。このとき  $\tau(\beta)$  の値は  $\tau$  の選び方によらず  $\varepsilon$  のみから定まる (実際、 $\tau' \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  も  $\tau'(\alpha) = \varepsilon$  をみたすならば、 $(\tau^{-1} \circ \tau')(\alpha) = \alpha$  だから、 $\tau^{-1} \circ \tau'$  は  $K(\alpha)$  上で恒等写像であり、さらに  $\beta \in K(\alpha)$  だから、 $(\tau^{-1} \circ \tau')(\beta) = \beta$  すなわち  $\tau'(\beta) = \tau(\beta)$  を得る)。また、 $\tau(\beta) \in \text{Conj}(\beta, K)$  に注意すれば、 $\sigma_{\tau(\beta)} \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  が  $\varepsilon$  のみから定まることもわかる。ここで、上の  $\sigma_\delta$  の定義から  $\sigma_{\tau(\beta)}(\beta) = \tau(\beta)$ 、すなわち  $\sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\tau(\beta)) = \beta$  だから、 $\sigma_{\tau(\beta)}^{-1} \circ \tau \in \text{Aut}(\overline{K}/K(\beta))$ 。よって

$$\sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\varepsilon) = \left( \sigma_{\tau(\beta)}^{-1} \circ \tau \right) (\alpha) \in \text{Conj}(\alpha, K(\beta))$$

であり

$$G : \text{Conj}(\alpha, K) \longrightarrow \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K), \quad \varepsilon \mapsto \left( \sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\varepsilon), \tau(\beta) \right)$$

が定義される。

(3)  $F \circ G$  が恒等写像であることの証明:  $\varepsilon \in \text{Conj}(\alpha, K)$  に対して、 $\tau(\alpha) = \varepsilon$  をみたす  $\tau \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  をとると

$$F(G(\varepsilon)) = F \left( \sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\varepsilon), \tau(\beta) \right) = \sigma_{\tau(\beta)} \left( \sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\varepsilon) \right) = \varepsilon$$

よって  $F \circ G$  は  $\text{Conj}(\alpha, K)$  上の恒等写像である。

(4)  $G \circ F$  が恒等写像であることの証明:  $(\gamma, \delta) \in \text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K)$  に対して、 $F(\gamma, \delta) = \sigma_\delta(\gamma)$  である。いま  $\gamma$  に対して、 $\rho(\alpha) = \gamma$  をみたす  $\rho \in \text{Aut}(\overline{K}/K(\beta))$  が存在する。この  $\rho$  を用いると、 $\sigma_\delta(\rho(\alpha)) = \sigma_\delta(\gamma)$  より、 $\tau(\alpha) = \sigma_\delta(\gamma)$  をみたす  $\tau \in \text{Aut}(\overline{K}/K)$  として  $\tau = \sigma_\delta \circ \rho$  をとることができる。さらに  $\rho(\beta) = \beta$  なので、 $\tau(\beta) = \sigma_\delta(\rho(\beta)) = \sigma_\delta(\beta) = \delta$  となるから

$$G(F(\gamma, \delta)) = G(\sigma_\delta(\gamma)) = \left( \sigma_{\tau(\beta)}^{-1}(\sigma_\delta(\gamma)), \tau(\beta) \right) = \left( \sigma_\delta^{-1}(\sigma_\delta(\gamma)), \delta \right) = (\gamma, \delta)$$

よって  $G \circ F$  は  $\text{Conj}(\alpha, K(\beta)) \times \text{Conj}(\beta, K)$  上の恒等写像である。  $\square$